

第十四講 講評とまとめ

レポート講評：

多くのレポートは歴史学がその学問的根底に据えている史料とその上に展開される史料主義について触れていた。ひとつは歴史学が言語テキストを基盤としていることから言葉を媒介項とする現実認識の主観性を強調するものであり、今ひとつは我々の認識能力の限界に起因する認識の一面性・部分性を指摘するものであった。その何れもがそのようなテキストに依拠して構築される過去のフィクション性を指摘するものである。

では歴史学は文学のひとつのジャンルにしか過ぎず、歴史学が構築してきた過去は虚像でしかないのか、という疑問が生じてくる。多くのレポートがそのような疑義が歴史学にはつきまどっていることを肯定する。しかし歴史学が自らの虚構性を認めることで学問的営為は終着点に到達してしまうのか。いくつかのレポートは過去の現実と過去についての虚像の両方に足を掛けているとして考察を終えているが、多くのレポートはこの終着点を新たな考察の出発点と捉えている。

歴史学がこれまで追求してきた事実の真実性を絶対的に証明できないので歴史学における事実の追求を無意味と断定し、歴史学は事実を組み立てて過去を再構築するのではなく、事実に基づいて想定される過去の意味を構築していくことに研究の方向を転換すべきだと提唱するレポートもあった。しかし多くのレポートは事実の真実性に接近していく営為こそが歴史学には要求されているのだとする。それは伝統的な方法ではあるが史料批判が将にそれだと言うのである。なぜなら史料批判は史料の信憑性を疑って掛かる事に前提条件をおいているからである。その意味で多くのレポートは歴史学は言語論的転回での議論を受け入れる

ことができると考えている。

あるレポートはランケの歴史学の目的は過去が「本来いかにあったのか」を解明することにあるとして、過去そのものではなく過去を史料解釈という手順を経て再構築していくことに歴史学の意味を見出そうとしている。ここでは解釈という経験的歴史学の方法論が前面に出されてくる。問題は解釈の妥当性、再構築された過去像の客観性・真実性は担保されているのかということになる。

あるレポートは歴史家によって再構築される過去像がひとつではなく、多様な姿を描いている事に真実性は保証されていると主張し、またあるレポートは記述内容の全く異なる諸史料を比較することによって保証されると観ている。現実世界が無限の多様性の中に展開されるが故に再構築される過去像の多様性こそが真実性への接近を保証するものとなると考えているのだ。真実はひとつではないということか。

そこで思い起こされるのはトゥキュディデスの言葉である。前413年、シュラクサイを包囲する攻城壁をめぐる夜戦について「このときの様相については、ひとつひとつの出来事がどんなふうにかかったのか、どちらの陣営に尋ねても、確かめるのは容易なことではなかった。昼間の出来事なら比較的分かりやすいとはいえ、それでも現場に居合わせたものがすべてを知っているわけではなく、それぞれ自分の近くで起こったことだけをかろうじて知っている程度なのだ」（トゥキュディデス（藤縄謙三訳）『歴史2』、7.44.1）シュラクサイに面した湾内で戦われた海戦を目の前にしたアテナイ軍将兵についてトゥキュディデスは「というのも、ごく間近から戦場を眺め、しかも全員が一か所の戦闘を同時に見ているわけではなかったので、ある区域で見方が優勢に立つとそれ

を見たものはそのたびに元気づけられ、神々の名前を呼んで、祖国生還をかなえて下さるよう哀願したが、逆に敗勢の局面を目にした者は大きな悲鳴をあげ、ただ戦闘を眺めているだけの彼らの方が、実際に戦っている兵士たちよりも悲観的な気分を襲われるのだった。さらに戦況が互角の場面を中止している者は、いつまでも決着がつかない争いを見ているうちに、極度の不安のなかで気持ちといっしょに体までもねじらせながら、苦痛に耐え続けた。」(トゥキュディデス(藤縄謙三訳)、7.71.2-3より)、と記しているが実際に戦われている海戦の目撃者ですら海戦全体を見渡しているわけではなく、海戦の個々の局面を観ているに過ぎないことを伝えている。つまり人間の認識能力の部分性、不完全性、そして心理によって彩られる主観性がここから明らかとなる。

トゥキュディデスは矛盾し合う目撃者の証言を挙げることによって緊迫した状況、目撃者の心の中で激しく動く心理を見事に表現している。そしてその矛盾し合う証言を基にシュラクサイ湾内での海戦を再構成しているのであるが、海戦全体を完全に記述している訳ではない。先ずシュラクサイ側目撃者については言及されておらず、この海戦を戦った個々の将兵の証言も採録されていない。また記載されている証言も抽象化されて具体性に欠けている。だからと言って現代の歴史家がトゥキュディデス以上に完璧に事件を書ける訳でもない。歴史家の作業はアナーキーな状況にある証言群をもとに、自らの「判断」によって使用する事実を選択し、全体の中での意味や価値を付与したうえで抽象化を行うことで「過去」を再構成するのである。

証言と体験から事実を導き出していく際に働く「批判的検証」と「判断」、事実の時空上の位置と関係性、重要度を付与していく「分析」と「解釈」、組み立てられた事実を肉付けして切り取

られた過去を構築していく「記述」、これらの要素を歴史学から排除することは出来ない。その意味では歴史学は文学と変わらないのだろう。しかしレポートで指摘されているように、事実を創作・捏造することは歴史学では許されない。懐疑的精神とこの職業倫理、そして「歴史」の多様性が歴史学の客観性を担保するものではある。

文化史学とは何か

人間による思考・行為・その結果を文化と捉える。

思考・行為・行動・結果は価値観や関心、知識、経験、心理状況、思考形式や行動形式に影響される。

これらは個人によって異なるが、社会や時代によっても異なる。

歴史学そのものを文化的営為と捉える。

従って、文化史学では歴史学が扱う全ての対象を文化と捉え、時代や社会、国家や個人を文化に強く影響された文化的産物と位置付けて、過去を分析し評価する。

近代批判（時代と方法）としての文化史学

文化史学は近代を批判する学問として発展。

科学主義の時代への批判

ランケ史学が近代を象徴ずるとするなら、またマルクス主義の科学主義への性向が近代の特徴であるとするなら、文化史学はこれらの国家主義、合理主義に対する異議申し立てであった。

政治指導者が歴史の主役となり、庶民が名前も持たされず、群衆という塊でしか扱わない歴史学への批判であり、決別であった。

文化史学の矮小化

歴史学は文化史学を主観的だと非難してみたり、歴史学の非常に狭い領域しか扱っていないと矮小化したりしてきた。文化史学はそのような歴史学に対する抵抗であり戦いであった。文化史学は既存の歴史学の偏狭さを批判し、歴史学が目を向けようとしなかった世界、時には非合理的な世界に着目したのである。

文化史学の総体性（二重の総体性）

文化史学の特徴は何よりもその総体性にある。その総体性は二重である。ひとつは人間活動のすべてが文化であるという総体性。もうひとつはすべての行為は文化によって規定ないしは方向付けられているという意味での総体性。

これらの二重性によって文化史学は領域的広がりのみならず、文化の動態的把握を可能としている。またそれが故に歴史学のように外交史から社会経済史、社会経済史から社会史、社会史から文化史へと学問の中心軸を移していく必要性が文化史学にはなかった。

文化史学の領域

美術史や文芸史は文化史学の重要な領域であるが、それだけではない。生活史も重要な領域であるし、政治史も重要な領域である。人々の政治行動大きな影響を及ぼす価値観や理念、行動パターンも文化史学の重要な領域である。既にマックス・ウェーバーがエートスを論じたように、社会的資本が蓄積され、経済圏が拡大されても経済人としての行動は同じではない。即ちこれらの経済指標だけでは経済活動の特徴を説明できないのである。

個別的な様式の特徴を説明し、その発展と変相を観ていくだけでは十分とは言えない。社会が持つ文化的背景、何故そのような様式を受け入れていったのか、或いは必要としたのか、を観てい

かなくてはならないし、そのような様式を生産し消費していく文化を解明していかなくてはならない。

文化構築体と文化翻訳

何故なら文化史学はひとつの文化財の製作や、芸術的美を説明することで満足しないからである。文芸史や芸術史は文化史のひとつの分野でしかない。生活史や技術史も、政治史や経済史も文化史の中に含まれる。

文化構築（体）・・・ウェーバーのエートス論・アンダーソンの言語と国民国家・政治も経済も文化構築と考えられる
文化翻訳・・・翻訳者の主体性と自己の文化の中に外来文化を取り込んでいく。ベースボール（パワー）から野球（上手さ）へ（切磋琢磨、錬成、自己研鑽など）。

文化行動・・・個人や社会の行動はそれぞれの文化（行動規範や価値観、行動様式など）に規定されている。地震の時に机の下の潜る、とかゴミを掃除して帰る（「来た時より美しく」：掃除は他人がやるものではない）とか、「5分前集合」（cf.「京都時間」というのもあるが）、「名を惜しむ」（恥を恐れる）、合理的行動から非合理的行動への急変（座して死を待つよりは・・・：理性的行動から情緒的行動へ：カタストロフ論）、お上の意識（嘆願書・請願書）というのは小学校以来の学校で反復される実習の結果である。

文化規範

文化価値